



はじめに

秋がずいぶん深まりましたね。朝夕の冷え込みで、体調を崩されている先生は、おられませんでしょうか。私の秋は、美味しそうな香りとともに店頭に並ぶ、多くの果物に引かれつつ、「秋太り」を防ごうと、あまり効果のない闘いです。

全国大会まで、10日余りとなりました。環境整備、掲示づくり、単元展開の詰めなど、先生方の動きや会話に、いよいよ迫ってきたことを感じます。今回は、私たちがこれまで取り組んできた研究推進をしっかりと説明・発信するために、先々月から行ってきた学年別授業研究会を想定した研修をまとめ、それらを先生方と共有化することで、さらに意識統一を図りたいと思います。

### 1 「学び合い」のある授業と学年の取組

本校の「学び合い」とは、子どもが相互に意見交流し合いながら、自分の考えを修正・強化していくことです。そのため、子どもの思考を促し、意見をつなぎながら練り上げていく授業を目指しています。

ここで学年ごとに発信する必要があるのは、授業論に基づく具体的な子どもの姿とそれを目指して取り組んできた具体的な手立てです。参会される先生方が知りたいのは、理論や理念ではなく、どうすれば、公開授業のような授業ができ、子どもに育つのかという具体的な方法です。したがって、当該学年がどんな子どもを育てるために、どんな授業をどのように進めているかをできるだけ具体的に説明する必要があると思います。

ここで、「系統性」、つまり、「学び合い」のある授業づくりにおいて、各学年でどこまでねらうかという具体的な目標・子どもの姿が問題になることがあります。それは、具体的に示されれば、「〇年生は、～ができるようにすればいい。」というように、先生方が安心だからではないでしょうか。しかし、それは、子どもの実態と先生方それぞれの授業観に基づいて、目指す授業像とねらう子どもの姿を定めるべきものであり、それらを学年ごとに並べたものが「系統性」だと考えます。

### 2 「学び合いシート」と「白島ぶらん」の発信

まず、「学び合いシート」は、本校の授業づくりの「こだわり」が具体化できるように構築されているとらえていただきたいと思います。したがって、「学び合いシート」の説明が本校の授業づくりの理論・理念を説明することになります。

「こだわり」とは、次の四つです。

一つ目は、単元全体の展開において、本時は、何を学習するのかというように、本時の位置付けを考えることです。

二つ目は、すべての授業において、学習課題を「問い」の形で設定することです。矛盾

や意外性から問いを設定することによって、思考の必然性を持たせるのです。

三つ目は、思考する際に着目する側面・考える観点と思考の仕方・考え方を設定することです。思考の焦点化と問い・内容に沿った考え方の設定によって、思考を仕組み、ものの見方・考え方を育てることになるのです。

四つ目は、問いに至る手立てと思考が活性化する手立てをうつことです。これによって、子どもの主体的な思考活動と「学び合い」を展開しようとしているのです。

「白島ぶらん」の意図は、ズバリ、学びの「リンク」です。一つ一つの学習や行事を別々に取り組むのではなく、教科・領域を越えて、それぞれの学習が補い合ったり、深め合ったりしながら、学びを紡ぐイメージです。「徒然なるままに」31号で、三つのリンクについて詳しくお話しています。

一つ目は、「内容」のリンクです。メイン教科の学習内容や活動を補ったり、別の観点から迫ったりする学習をつなぐことです。

二つ目は、「思考・認識の仕方」のリンクです。例えば、5学年の前半の学習で重要だと考えられる、「条件的な見方・考え方」で展開する学習をつなぐことです。

三つ目は、一つのテーマ・問いに集約された単元展開です。メイン教科を中心に、あるテーマ・問いに迫るために必要な学習や活動を有機的に仕組むことです。

これらを理論・理念としてではなく、本単元・本時の展開に即して説明していただければと思います。つまり、「学び合いシート」の四つの特徴から、本時の意図と具体的な手立てについて、本単元のリンクのあり様から、「白島ぶらん」の意義を、それぞれ具体的に説明していただければと思います。

先日の全体研究日の際に、「『学び合いシート』を活用するようになって、授業づくりをする上で変わったことはどんなことか。」「『白島ぶらん』と年間指導計画の違いとは。」という二つの質問が挙げられました。これらは、それぞれの意味・意義や成果を、先生方の取組や実感から明らかにしようとする的確な問いです。恐らく、参会される先生方が聞きたいのは、この質問に対する返答でしょうし、これは、先生方にしか語れない「生の声」ではないでしょうか。これらを活用するようになって、難しいところ、困ったことや授業づくりにおいて考えるようになったこと、授業が変わったと感じることなどを、先生方がこれまで取り組まれてきたストーリーやエピソードで具体的に話していただければと思います。前者が授業づくりにおいて考えるべきポイントを、後者が目指す授業像を示すことになると考えられます。

なお、これらについては、研究推進計画や研究紀要に詳しく示していますので、今一度、ご一読ください。

### 3 提案授業を「説明」する

研究協議において、授業者にとっても、参会者にとっても学びとするためには、授業者が単元設定の意図や子どもの学びに至ったわけなど、授業づくりについて「説明」することが必要です。それは、授業づくりが偶然ではなく、意図によって必然となるからです。

授業は、大きく次の四つの観点で「説明」することになるでしょう。

一つ目は、単元設定の意図です。取り上げる教材の持つ内容(構造)とそこから見えてく

る社会といった教材の有効性、これまでの学習・取組とのつながりと子どもの(認識の)深化・変容、それらを生かす学習展開の手立てについて説明することです。

二つ目は、単元展開の仕組です。単元展開の基になっているストーリー、思考のプロセスを筋道立てて説明することです。このよりどころとなるのは、教材・学習内容の構造や社会の見方・考え方(～学的な見方・考え方)でしょう。

三つ目は、具体的な手立てについてです。ねらいと学習内容(の構造)に基づく学習問題と着目点・考え方の設定、学習活動の展開や資料提示の仕方、発問と思考の展開など、授業づくりの具体的な手立てとその意図を説明することです。その際、子どもの姿や思考・認識がそれらの有効性を考える手掛かりとなるでしょう。

四つ目は、目指す子どもの姿と評価です。この授業で、子どもにどのような思考をさせ、どのような認識へ深めるのかという子どもの姿を想定した上で、授業の有効性を説明することです。評価基準でいうと、B基準とC判定の子どもへの支援について、具体的な認識内容として想定しておく必要があると思います。

これら四つから分かることは、「説明」とは、「なぜ、こうしたのか。」「なぜ、こうすることができたのか。」というように、授業づくりの意図や原理を有機的に示したり、見出したりすることです。これが授業分析です。授業分析によって、授業論が明確になり、その理論に基づいて、よりよい授業づくりへと発展させていくことができるのです。私たち実践家は、授業分析のために、授業を「説明」する義務があります。そして、授業分析を積み重ねていくことによって、授業力が鍛えられるのでしょう。

なお、この点については、木村博一先生がある文献の中で述べられていますので、これもご一読ください。(3枚目に添付しています。)

#### 4 まとめに代えてー「信じる」こと

今回は、学年別授業研究会に向けて、私たちの取組と実践を「説明」・発信するために必要なことについてお話をさせていただきました。

研究協議というのは、何度経験していても、余り気持ちのいいものではないかもしれません。しかし、これまで3年間にわたって研究推進し、授業づくり



をしてきたのは、研修部だけでもなければ、私だけでもなく、先生方お一人お一人です。お一人お一人が本校の授業論を解釈し、イメージされ、ご自分の持ち味を発揮して授業づくりを進めてこられました。そこが本校のすばらしさであり、力です。そんなご自分とご自分の取組を「信じ」て、公開授業にも、研究協議にも臨んでいただきたいと思えます。そして、ご自分の授業づくりを十分に発揮し、発信しましょう。

と同時に発信するのは、紛れもなく、活躍する子どもの姿です。子どもの環境は、私たちの教育活動に都合がいい部分ばかりではありません。「うちの子は、全然エンジンがかからんのじゃけど。」というぼやき声を聞くことがあります。しかし、子どもたちは、これまでの積み上げで培った力と、私たち教師の意気込みで、きっとすばらしい学習を展開するはずです。子どもの持つ底力を信じて、最後まで授業づくりに取り組んでいただきたいと思えます。そして、よりよい学びを展開しましょう。



あと10日余りの日々を、「信じる」ことを忘れず、「挑戦」し続けようではありませんか。もし、困ったことや相談などありましたら、いつでもお申し出ください。いっしょに考えましょう。

最後になりましたが、先生方、体調には、十分に留意されてください。

● お 願 い ●

先日前話ししましたように、研究協力員の先生方との打ち合わせをお願いします。そこで、決定した「授業研究の観点」を10月23日お帰りまでに、

サーバー→2015年→★研修部→★全国大会関係→学年別授業研究会一覧

へ入力ください。よろしくお願いいたします。